

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(1)

庄籠しょうじょうり 道子

これは実話にもとづくメルヘンです。たけのこ幼稚園での不思議でおかしな「異」との出会い。薄茶色くなった写真のような懐かしい光景ですが、これは現代の幼稚園で実際にあったお話が元になっています。「ラジオのおっちゃん」登場は次回のお楽しみですが、子どもという「異」との出会いは始まっています。

(編集部)

「げたばこ、持ってかえる」の巻

「なんてことを言うの！」

突然、籠（こもり）先生が叫びはじめた。三人組は、ぎよっとした。

園庭で遊んでたんだ。おにごっこして。籠先生もいっしょに。

幼稚園のお向かいの家に、くみとりさんが来たん

だ。トイレにたまつたうんちやおしっこを、バキュームカーでくみとってくれる。

「くさー」つてりようたが言った。「ほんまや、くさー！」つてたつやが言った。仲良し三人組だもの。ほくだつて言わなくちゃと、「くさ、くつさー！」としなりも負けじと大声を出した。

籠先生の顔色が変わつたことに三人とも気がつかなかつた。「くさー!」「くつさー!」何回も言った。

「なんてことを言うの!」籠先生が真つ赤な顔で叫んだのだ。突然、身体がぶるぶるふるえている。

「言われた人は、うれしいと思うの?……失礼だと思わないの?……くさいって……くさいって、みんながしたうんちでしょう?……くみとりさんが来てくれへんやつたら、あなたの家かて、うんちだらけになるんやないの!」

あまりの剣幕に、三人とも顔色が変わつた。籠先

生は真つ赤だけど、三人組の方は青くなつた。うつむいて「はい」と言うしかなかつた。

籠先生はさんざんとなつたあと、もうどなる言葉が思いつかなくなつたらしく、まだ少し震えながらどっかへ行つた。

三人組はこつそりめくばせした。

おい。籠先生つて、あんなにこわい先生だつて知つとつたか?

いいや。知らんかつた。

入園して三日、籠先生、ずつとやさしかつたなあ。

うん。でも、怒らせるとこわいから、気をつけような。

おお。気をつけよう。

かたづけの時間になり、みんな部屋に入った。三人組はこつそり籠先生の顔を見た。いつもの顔だ。

ほつ。この人、立ち直りが早いらしいぞ。よかつた。よかつた。

「きょうは十二時に帰ります。今から、おやつを食べます」

竹田園長先生がおせんべいと牛乳を配ってくれた。やったね。

けど、おせんべい、たった一枚かよ。あ、袋にまだ何枚が残ってるぞ。

「先生、おかわり、あるん？」りょうたが聞いた。

「おかわり あらへん。ひとり一枚」と竹田園長先生。

「でも、袋に……」

言いかけたら、籠先生がじろつとこつちを見た。

ああこわー。きつと後で籠先生がこっそり食べるんやな。

「食べた人から、はみがきをして。それで、明日はお休みやから、はぶらしとコップを持って帰りま

す。袋に入れてかばんにしまおうね」

「はい」

はぶらしと、コップをしまつて、リュックをかけて、水筒も肩からかけて、帽子もかぶつて……みんながそれぞれ帰る用意をしていると、たかよが思いつめた顔で籠先生に聞いた。

「せんせい」

「はい」

「あのね……あの……きょう、げたばこ、持つて帰るんでしょ」

「へっ？」

籠先生は目を真ん丸くしてたかよの顔を見た。しばらく、まじまじとたかよの顔を見た後、気を取り直すようにして籠先生は言った。

「たかよちゃん、あんな大きなもの、持つて帰られへんでしょ。それに、幼稚園のものをおうちにもつ

て帰られたら、困るんやけど」

今度はたかよがびつくりした顔をしてげんそうに言った。

「えっ？ 幼稚園のやったん？」

「あたりまえやん」

あたりまえだと言われて、たかよはものすごくびつくりしたみたいだった。

「ええーっ、幼稚園のやったん。えー、うそーっ、なんでー……」そこまでびつくりして、たかよは、何かに気がついた様子で聞いた。

「なんで、なんで幼稚園のやのに、たかよって、たかよの名前が書いてあるん？」

「ああ、あれはね、みんなが幼稚園に入園してくる前に、籠先生が書いたのよ」

「うっそーっ、たかよのお母さんが書いたんやで。たかよ、見たもん」

籠先生は、いいかげんにいやになってきたみたい

だった。むっとした顔で言った。

「籠先生が書いたの！ 誰がどこに入れたらいいか、よくわかるように！」

籠先生の声がきつくなってきたので、三人組は気がじやなかつた。籠先生を怒らせたらあかんがな。しかし、たかよはめげない。

「入れるって、袋のこと？ えー、あれも幼稚園のもの？ えー、うそー、たかよのお母さんが作ったのに！ なんで、幼稚園は、何でもかんでも幼稚園のものにしてしまうのー？」

叫びながら、たかよは泣き出してしまった。

みんなが寄ってきた。竹田園長先生も

「どないしたん？」と聞きに来た。

たかよは、泣きながら自分のロッカーに走っていきくと、うわぐつを入れる袋を持ってきた。そして、「これ、たかよのお母さんが、たかよのために作ってくれたんや。せやのに、籠先生が、これ、幼稚園

のもんやって言うーっ！」

と、大泣きしながら、みんなに訴えた。

「ひどーい！ たかよちゃんのお母さんがたかよちゃんのために、心をこめて作ったのに、それを幼稚園のものにするなんて！」

あいこやなみかが口をとんがらかして籠先生をにらんだ。籠先生はあせった。

「ちよつと待ってよ。私、そんなこと言うてへんでー」

今度は、たかよは、はいていたうわぐつを脱いだ。うわぐつとうわぐつの袋を並べて

「これも、これも、たかよつて名前が書いてあるのに、せやのに、幼稚園のや、言うたー！」

そう言うと、一段と大声を張り上げて泣いた。

あいこたちが

「違うよねー。たかよちゃんのやんねー。かわいそうにねー」

と、たかよの背中をなせてやっている。籠先生は、困ってしまったて小さな声で言った。

「だって、たかよちゃんが、げたばこ、持って帰るって言うから、幼稚園のもの、持って帰ったらあかん、言うたんや。……うわぐつを持って帰るって言うってたんやね」

たかよが、突然、ピタリと泣き止んだ。

「えっ？ げたばこと、うわぐつって、違うん？」
一瞬、部屋中がしーんと静かになった。竹田園長先生が、まず笑い出した。わけがわかった子は笑った。何だかよくわからない子も、つられて笑った。

(保育研究グループ はるにれ)